

# 幼稚園における動物介在教育の実践～その2

## ——こども動物教室と幼稚園との連携の実際——

永井 理恵子<sup>1)</sup>・溝口 綾子<sup>1) 2)</sup>

1) 帝京短期大学 こども教育学科      2) 帝京めぐみ幼稚園

### 【抄録】

**【問題・目的】** 帝京めぐみ幼稚園では2006年より17年間にわたって「動物介在教育」を実践してきた。この実践は帝京科学大学教育人間科学部こども学科の動物介在システム研究室と連携しておこなわれている教育活動であり、開始時より一貫して在園児と保護者の興味関心が大きい活動である。一昨年度は特に、この活動にかかわる教諭の意識の変容に焦点を当てて分析を試み、昨年度は幼児に注目し、動物とのかかわりの様態の変容の考察を試みた。3年目である今回は、動物介在教育を実践している「こども動物教室アニマルシップ」(以下、アニマルシップ)と同園との動物介在教育実践における連携の様子を事例報告する。

**【方法】** 2023年5月から10月までに実施された「動物介在教育」全5回を参観し、活動の実際を記録するとともに、動物介在教育を実践している「アニマルシップ」介在者に教育実践において意図していることを聞き取る一方、幼稚園教諭の担当者にも聞き取りを実施し、プログラム立案・実践者とそれを受ける幼稚園教諭の連携の実際を紹介する。

**【結果】** 第3回目である今回は、帝京めぐみ幼稚園における動物介在教育に関する実践報告になる。今回は上記のような主題のもと、プログラムを立案・実施する「アニマルシップ」介在者と、幼稚園教諭の連携の実際注目して観察調査を実施したと同時に、両者への聞き取り調査をおこなった。この結果として、動物介在教育の実践の成果は、動物介在の専門家である介在者がリードを取りながらも、その意義を教諭が十分に理解して適切なサポートに入るとともに、介在者のほうも幼児期における動物介在教育の役割をよく研究して実践に当たっていることが確認された。

**【考察】** 動物介在教育は、各クラス15分程度の短い時間でおこなわれた実践である。この実践は時間的には短くても、その間の活動運営は動物介在教育の意義と役割を十分に理解した専門家である介在者によっておこなわれており、だからこそ短時間でも大きな成果を得られている。教諭は、幼児の様子を注意深く確認して的確なサポートに入るのは勿論、時には幼児たちとともに新鮮な思いで動物に接し、ともに楽しい学びの姿勢を持っていた。介在者と教諭が互いの専門性を理解したうえで一つの活動に携わることで、大きな成果が得られている。また、今回の研究で我々が明らかに学んだこととして、介在者と動物との深い関係があつてこそその活動であることも挙げられる。介在者は、まずは動物の深い理解者であり、時に興味ゆえに強い姿勢を示す幼児たちから動物を守る立場にもなっていた。介在者は動物を、動物介在教育を実践するパートナーであると認識している。この介在者の思いが幼児たちに伝わり、この有意義な活動が初めて顕著に結実していることが明らかとなった。

**【キーワード】** 動物介在教育, 幼児, 介在者, 教諭, 幼稚園教育要領

### I. 問題・目的 (はじめに)

帝京めぐみ幼稚園(以下、本園という)では2006年より17年にわたって「動物介在教育」を実践している。この実践は、本園と同系列にある帝京科学大学の教育人間科学部こども学科の

動物介在システム研究室および花園誠教授と連携しておこなわれている教育活動であり、実際の動物との触れ合い体験を意図的に計画し実践しようとするものである。この活動については溝口(以下、第二筆者)が「幼稚園における動物介在教育の実践—身近な動物とのふれあい体

験を通して一」(日本教材学会発行『教材学研究』第18巻 2007年3月, pp. 219～226所収)<sup>i</sup>と題した論文にまとめられている。この論文中において第二筆者は、2006年度に実施された3回の実践の概要(対象児, 参加介在者, 動物リスト, プログラム内容など)を示したうえで, 活動中の様子を8つの事例を挙げて紹介し, 保護者へのアンケートも併せて, この活動の全体像を描出している。加えて永井(以下, 第一筆者)は2018年度より, 本園の「動物介在教育」に触れる機会を得, 興味関心を抱き, 定期的に観察を実施した。2021年度には特に教諭らが「動物介在教育」に対して抱いている意識の実態に注目し, 園長(第二筆者)と教諭らの協力を得て調査を実施し, 「幼稚園における動物介在教育にかかわる保育者の意識の変容」と題して事例報告をまとめた(『帝京短期大学紀要』No. 23:165-174, 2022)<sup>ii</sup>。続く2022年度は年齢が上がることにより動物との関わりかたが変容していくさまに注目し, 成長過程に伴って3年にわたり動物介在教育を体験することの意義深さを確認することができた(「幼稚園にける動物介在教育の実践—幼児の動物とのかかわりの様態の変容」『帝京短期大学紀要』No. 24:153-169, 2023)<sup>iii</sup>。

本園における動物介在教育は, 2020年度からのコロナ禍により2020年度は実施が中断, 2021年度から再開したものの月1回の定例開催は困難であった。2022年度は4月当初から月1回の定例開催が復活したが, 動物介在システム研究室が東京西キャンパス(山梨県上野原市)にあり県境を越えての介在者および動物の移動の完全復活が困難であるため, 花園誠教授がアドバイザーを務め同研究室の卒業生によって運営がおこなわれている「こども動物教室アニマルシップ」(東京都足立区)の紹介を受け, 運営を移譲して実施している。ここでは「幼児達に本物の体験を!」をねらいとし, ①動物を連れて行き, 触れ合いを中心とした内容を提供, ②介在者は動物介在教育の有識者で, 子育ての経験者, ③動物たちは選ばれた安全な動物(SPF動物・検査を受けたクリーンな動物)を特徴としている(同ホームページよりまとめた)。

本年度は, 5月より月に1回のペースで定期的に行われている動物介在教育の追跡調査を継続する傍ら, 現在プログラムを立案し実施し

ている「こども動物教室アニマルシップ」(以下, アニマルシップ)職員(介在者)および幼稚園教諭に聞き取りをおこない, 「アニマルシップ」と幼稚園がどのように連携し, 実際の活動に反映されているかについて考察することを試みた。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

実践観察調査においては, 幼児(園児)および介在者と教諭を調査対象とする。特に今回は, 介在者が留意している点を明らかに示す実践場面を抽出するよう意図して観察したが, 幼児の目覚ましい成長ぶりや興味深い発言などについては, 今回の研究目的に直接的に合致しないことについても記録に残している。

従来より実施しているアンケート調査は, 今回は教諭のみを対象としている。

加えて今回の調査の特徴として, 動物介在教育の立案・実施者である「アニマルシップ」の職員(以下, 介在者)のなかから実際に本園に実践に来ている介在者2名に聞き取り調査を実施した他, 同園で動物介在教育の2023年度担当者である教諭にも聞き取り調査をおこない, 団体と園との連携について明らかにすることとした。

### 2. 調査時期

2023年度5月の第1回を今回の研究の開始とし, 以下の日程で調査を実施している。

#### (1) 観察調査

- 1, 5月31日(水)
- 2, 6月22日(木)
- 3, 7月6日(木)
- 4, 9月19日(火)
- 5, 10月24日(火)

なお, 今回の記録中の一本下線は, アニマルシップ介在者の理念を示す言動, 二本下線は教諭の言動を示す箇所, 波線は特徴的な幼児の言動である。

#### (2) アンケート調査

教諭に対して 5月, 6月, 7月 各1回

#### (3) 聞き取り調査

- a, アニマルシップ職員(介在者)2名
- b, 幼稚園教諭(2023年度動物介在教育担当者)2名

### 3. 調査内容

#### (1) 実践観察調査

調査方法は自然観察法を用い、幼児の様子、および介在者・教諭の援助指導のすがたを筆記および写真で記録し分析した。調査は第一筆者と第二筆者が共におこなった。

#### (2) アンケート調査

教諭に対して3回のアンケート調査を実施した。「触れ合いの方法」「動物とのかかわりと幼児の状態」「コロナ禍における配慮と場所の設営」「教諭（担任）としての援助」「次回に向けて」の各項目を立てて、自由記述を求めた。

今回は、5、6、7月と3回の動物介在教育が実施された後、各学年の教諭にアンケート調査を実施した。調査内容は①幼児の状態、②介在者の援助、③教諭の援助の3項目で、自由記述形式で回答を得た。

#### (3) 聞き取り調査

アニマルシップ職員（介在者2名）と幼稚園教諭（2023年度動物介在教育担当者2名）の計4名に対して、アニマルシップの基本方針と立案、アニマルシップとの関係について質問をおこなった。

- a, アニマルシップ職員（介在者）：2名 K<sup>1</sup>, K<sup>2</sup>  
聞き取り：第一筆者、第二筆者
- b, 幼稚園教諭：T<sup>1</sup>, T<sup>2</sup>  
聞き取り：第一筆者

### 4. 倫理的配慮

掲載写真については全て、写っている当該者もしくは保護者より顔を出しての掲載許可を得ている。また、個人名は記載せず、介在者・教諭は番号、幼児は幼児のみとしている。報告書作成に当たり関係した本園、アニマルシップには原稿を提出し、掲載についての承諾を得ている。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1, 第1回実践観察調査

年月日：2023年5月31日（水）10：00～11：55  
介在者3名（K<sup>1</sup>, K<sup>2</sup>, K<sup>3</sup>）

#### 1) 動物の概要

犬5頭

くるみくん（プードルとキャバリアのミックス）  
（小型）10歳の最高齢

さくらちゃん（プードルとピジョンフリーゼのミックス）（小型）

BORUTO（ボルト）くん（ボーダー・コリー）  
（中型）

まるくん（ボーダー・コリーと柴犬のミックス）  
（中型）

あんずちゃん（ペキニーズとミニプードルのミックス）（小型）

#### 2) 時間の流れ

10：00～10：15 そらくみ（保育室にて）年中

10：15～10：30 にじぐみ（保育室にて）年中

10：35～10：55 つきぐみ（保育室にて）年少

11：00～11：15 ほしぐみ（同上）年少

11：20～11：35 やま1くみ（同上）年長

11：40～11：55 やま2くみ（同上）年長

#### 3) 基本的な運営

どのクラスでも以下の流れで実施された。

①幼児たちが定位置に座る（教諭の援助指導のもと）

②犬との近づきかたと触りかたの指導

最初は握りこぶしで匂いを嗅がせる

手のひらを開いて鼻先に近づける

触る時は上から頭を触ることはせず、背中を首のほうから下へ向けてそっとなでる

慣れてきたら頭も触って良い

大声を出さない

③3グループに分かれ、各1頭ずつを介在者が連れてきて順に触れ合い時間をもつ。

触れ合いは、グーで匂いを嗅がせる、手のひらで触る、を基本とする。

#### 4) 幼児の様子

①年中組

・そらくみ

介在者が「ひとつ大きくなったから、やさしくしてあげてね。たくさんほめてあげると喜びます。みんながとてもやさしいから安心していいのよ」と声を掛けている。あたまをなでて優しくしている幼児が多い。

「ほくのわんちゃん。（と言いながらハグして）かわいい～。かわいすぎる。うちにきてほしいな」と言っている。

・にじぐみ

「みんなから名前がちょこちょこ出てきて嬉しいです」と介在者が言う。

「お背中を優しく触ってあげてね」と介在者が自分の腰をさすって見せると、それに合わせて自

分も同じことをしている幼児が2名いた。

かわいい、かわいいという声があちこちから聞こえる。「わんちゃん、大好き」という声。介在者が「ボルトくんに触ってもらうの、今日は初めてです」と話す。幼児が「こわい〜」と言ったところ、すぐに教諭が来て傍に寄り添った。(ボルトくんはマズルが長くシャープな顔つきをしていると共に、動きも俊敏である)



写真1

介在者の目を見ながらボルトくんに触れる年中児  
(教諭が援助している)

「よしよし〜」と言って背中を毛並みに沿って撫でている幼児がいる。「〇〇ちゃんね、ねこちゃんのぬいぐるみ持ってるの」と介在者に言う幼児がいる。

## ②年少組

### ・つきぐみ

年少では、さくらちゃん、くるみちゃん、あんずちゃんと、可愛い犬種を選んでいる。年少は初めての介在なので、とても静かで、あつげにとられてみている幼児が多い。

## ③年長組

### ・やま1くみ

やはり背中を撫でる仕草を、介在者を真似てやっている幼児がいる。

ボルトとまるくんが出てきたので、怖そうな顔をしている幼児が多く散見されたが、それでも触ってみている。「〇〇くん(自分の名前)からいきます」と自分で言って触り始めた幼児がいた。

### ・やま2くみ

「ボルトくんいる!」と早速に見つけて名前を

呼んだ幼児がいる。

年長ともなると介在者もこまかな犬の特徴なども話している。ボルトくんのことも、ものおじせずに触っている。

くるみちゃんは「お手」ができる。「お手」をした瞬間、幼児2名が「きゃ〜かわいい」と、とてもかわいいこえで歓声を上げていた。

幼児6名の班は、まるくんに迫りすぎ、まるくんは臆病なのですっかり怯えて吠えていた。

## 5) 分析

介在者が教諭に、「ご希望があれば言ってください」と話していた。立ち話をしたところ、この幼児たちにはとてもやさしくしてもらえることを犬たちは知っているの、ここに来ると嬉しそうにしているとのことだった。

活動のなかで介在者が、「優しく触ってあげてね」「ほめてあげると喜ぶます」「みんなから名前がちょこちょこ出てきて嬉しいです」といった言葉が幼児に掛けられていた。介在者が動物に愛情をもって接している様子を示し、幼児にも同様であることを希望している様子が確認できる。

## 2. 第2回実践観察調査

年月日：2023年6月22日(木)10:00～11:40  
介在者3名(K<sup>1</sup>, K<sup>2</sup>, K<sup>3</sup>)

### 1) 動物の概要

動物 モルモット 数匹(あられちゃん、チョコちゃん、おぐらくん他)

### 2) 時間の流れ

10:00～10:35 年少2クラス(第一筆者, 2クラス目のつきぐみから観察開始, 10:20～10:35)

10:45～10:58 にじぐみ(保育室にて) 年中

11:03～11:20 そらぐみ(保育室にて) 年中

11:23～11:40 やま1くみ(保育室にて) 年長

11:42～12:05 やま2くみ(保育室にて) 年長

### 3) 基本的な運営

どのクラスでも以下の流れである。

①幼児たちが定位置に座る(教諭の援助指導のもと、座って待っている)

### ②モルモットの触りかたの指導

犬のように握りこぶしで匂いを嗅がせる必要は無いことを介在者が口頭で伝える  
頭のほうから尻のほうに向けて一方向でそっと撫でるようにする

大声を出さない

(「動物さんと仲良くするにはどうするんだっけ?」と幼児に訊いている。「静かにする」と幼児たちが答えていた)

③3班に分かれるように介在者から指示があり、教諭が分ける

④各班にモルモットを1匹つれた介在者がやってきて、年中児以上は脚を投げ出して座るように指示し、籐の籠のようなものに入れたモルモットを一人ずつ順番に脚に乗せて触るように指導。片手で籠を押さえ、反対の手でモルモットに触るように指示している。

4) 幼児の様子

①年少組

・つきぐみ (幼児12名)

あられちゃん、チョコちゃん、おぐらくんの3匹(以下、介在者はK、幼児はCとする)

K「この前は、何が来たかな〜?」

C「犬!」

K「そうだね。今日は、モのつく動物さん。」

C「モムスター!」

「惜しい!」

その後、介在者がモルモットの紹介をしている。3歳児は動物介在教育で初めてモルモットに接するので、とても興味深そうに見ている。動物が小型で可愛らしい動物だからか、怯える様子の幼児もおらず、皆とても静かに頷きながら介在者の話を聞いている。熱心な様子が印象的である。

K「モルモットはね、頭を触られるのは好きじゃないの。それから、お口の周りに手を持っていくと食べ物と間違えてパクっとやるから、もっていかないようにね。」

一回、介在者が籠を持って周り、各班で全員に触らせている。

そのうち、質問をしている。

K「目の色は?みんなの目の色は何色?そうだね、黒だね。おぐらくんは?そうね、白と赤だね」「尻尾はあるかな?ないね。あと、お尻はつるつるしているね。」

介在者の言葉に頷きながら、そっと順に手を出して触っている。

C「つるつるしてる〜」などと呟いている。

幼児が、よく頷きながら熱心に見ている様子が忘れがたい。

②年中組

・にじぐみ (幼児12名) 10:35~

流れとしては年少クラスに加え、最後の段階で膝に籠を載せて触るという段階が加えられている。

幼児の言葉として「豚みたい」「前にも触ったことある」「目の色は赤い!」「(これは何?という介在者の問いかけに)耳!」「ちょうちょみたいな可愛いお耳してるね」「お目目が可愛い」「しっぽがない」「かわいい〜」「モルモットちゃん」などと其々に呟いている。

介在者の話を興味深く聞き、「うんうん」と頷いている様子が見られる。このクラスの幼児たちは積極的に発言し触っている様子が見られる。年中になってあまり時間が経っていないものの、昨年度の成果があるのかモルモットに対して恐れることなく接していた。

・そらぐみ 10:50~ (幼児14名)

「目が赤い」「匂いを嗅いでる」「目が眠くなってきた(そのまま)」「うっとりしてる」などと、モルモットに声を掛けたり、一人ごとを呟いている。「尻尾がないね」という介在者の言葉がけに尻尾がないことを自分で確認した一人の幼児が「しっぽ忘れたんだよ」と呟いていて興味深かった。

昨年度もそらぐみ(年中児)に見られた特徴と同じで、モルモットを生きる仲間として自分の生活の場面に照らし合わせて認識している(一種のアニミズム的な)ことがわかる。

③年長組

・やま1くみ 11:05~ (幼児9名)

「頭を触られるの好きじゃないから」と介在者が全体に話したところ、「そんなことわかってるよ」と小声でつぶやく幼児がいた。

「なんで今日は茶色なの?」「前に見たことあるよ」と話す幼児、「寝ちゃいそうになっているよ」「耳が垂れているね」など、観察が鋭い。また、「何歳なの?」と年齢を訊いている幼児があり、介在者が「だいたい3歳くらいかな」と答えていた。

介在者は名前を幼児たちに何度も確認していた。

介在者が「脚で支えて、片手で撫でてあげてね。できる?」と話している。かなりバランスを取るのが難しそうだが、幼児たちは黙って頷いて挑戦している。幼児は全身が固くなり、とても緊張し集中して動物と向き合っている様子

が窺える。

介在者「お名前も一人ずつついていますから、せっかくなら覚えてあげてくださいね」と発言していた。

・やま2くみ（幼児11名）

年長ともなると、介在者の指示通りではなく独自の手法で触ることを試みる幼児も出てくる。介在者の話を聞いていないというよりも、色々な触り方を試している様子である。そして、触ったあとの手のひらを自分でじっとみつめたり、手のひらのおいを嗅いだりしている幼児もいて大変に興味深い。感触や臭覚なども活用して動物の姿を捉えようとしていると判断できる。

介在者の「尻尾は、あるかな？」との問いに、このクラスでは「ないないないない」と答える幼児がいた。

一人の幼児がモルモットを観察していて、隣に教諭がおり、幼児が教諭に「ねえ」と言った瞬間に教諭が別の幼児のところに行ってしまった。そうしたところ、その幼児はとても残念そうに教諭のことを目で追っていた。その幼児は触るのが怖くて教諭の支えを求めているのではなく、教諭と一緒に見たかったのではないだろうか。共に向かい、共感する他者が存在することは、非常に重要であることを確認できた一瞬の出来事であった。

モルモットに対して色々な触り方をする幼児集団の班があった。介在者は男性が担当していたが、途中で幼児たちに「強い強い、もっと優しくして」と何度も声を掛けていたとともに、モルモットを守るように上から腕を差しかけていたのが印象に残った。介在者はさすがに専門家であり、動物介在教育の介在者であると同時に動物福祉の観点から動物にストレスがかからないように十分に配慮しているのであろう。

この介在者の言葉がけが功を奏したか、同じ幼児がそっと手を差し出し、手のひらが触るか触らないかのところでモルモットの毛に触れるようにしていた様子も確認できた。また、うとうとしているモルモットに対して幼児が、「脚を触るとどうなるの?」と訊いたところ、介在者が「脚を触ると起きちゃうの」と答えていた。答えを聞いた幼児は「ふ〜ん・・・」と静かに応えて、考え込んでいた。幼児であっても、幼児にわかる言葉で丁寧に伝えることにより、幼児なりの動物との接し方を学び、自ら考え、動

物の気持ちに思いを馳せていることがわかり、興味深い状況であった。

帰りに、幼児たちは「あられちゃん、ばいばい」と言ったように名前呼びかけて別れている姿が確認できた。年長児となると口々に固有名詞で呼んで別れを惜しんでいた。

5) 介在者への聞き取り

今回は終了後に介在者 K<sup>1</sup> に聞き取り調査をおこなった。

・膝に載せさせているのは、動物の重さを感じることと、自分で持っている感覚、自分が命を守っている感覚を持たせるための教育的配慮であるそうである。

・固有名詞で呼ばせているのは、動物にも個性があり個体ごとに特徴があることを知ってもらうためだそうである。

・たとえモルモットでも環境の雰囲気によって状態が変容するのか尋ねたところ、全く違ってくるのであった。めぐみ幼稚園では、幼児たちが優しく接してくれるので、どの動物もそれをわかっていて安心してうたたねしたり、じっとしていたりしているのだということだった。また、モルモットに尻尾がないのは、要らないため退化したとのことである。

6) 分析

今回はモルモットとの活動であったが、介在者が「モルモットはね、頭を触られるのは好きじゃないの」と、どのクラスにおいても伝えているのが印象的であった。これに対して幼児たちは素直に話を聞いているが、そんななかで年長の一人の幼児が「そんなことわかってるよ」と小声でつぶやいていたのが興味深かった。

また、モルモットという、一般的には記名性の薄い動物であるにもかかわらず、頭部に色を付け、それによって名前をつけて個体化を図っているのが重要である。幼児たちは学年が上がるに連れて固有名詞を覚え、名前で挨拶をしている様子が確認できた。

### 3. 第3回実践観察調査

年月日：2023年7月6日（木）10：15～12：00  
介在者3名（K<sup>1</sup>、K<sup>2</sup>、K<sup>3</sup>）

1) 動物の概要

モルモット数匹

（シャインマスカットちゃん、いちごちゃん、クリームちゃん、ブルーベリーちゃん）

## 2) 時間の流れ

- 10:20～10:35 ほしぐみ(保育室にて)年少  
10:35～10:50 つきぐみ(保育室にて)年少  
10:50～11:05 にじぐみ(保育室にて)年中  
11:05～11:18 そらぐみ(保育室にて)年中  
11:18～11:35 やま1くみ(保育室にて)年長  
11:35～11:50 やま2くみ(保育室にて)年長

## 3) 基本的な運営

今回は前回と同じ動物のモルモットであったが、前回と異なり、よく観察してモルモットうちわを製作する活動がメインであった。幼児たちは各クラスとも定位置に座る(教諭の援助指導のもと、座って待っている)。

以下の点は前回、注意があったが、今回は2回目まで前回から日が経っていないこともあり省略だった。

※モルモットの触りかたの指導

※大声を出さない

これらを省略して活動に入った。通常の挨拶のあと、以下のような指示があるのは前回どおり。

※班に分かれるように介在者から指示があり、教諭が分ける

各クラス3班に分かれると、各班にモルモットを1匹つれた介在者がやってきて、プラスチックの四角いトレイに入れたモルモットを幼児たちの前に置いていく。その際に「触らないでね」と声掛けをしている。

その後、今回は、まずはご挨拶として、全部の幼児に軽くモルモットを撫でさせる。それから介在者1が、モルモットの確認をさせていく(「目は」「耳は」「身体は」「尻尾は」「手脚の長さは」…)。

こうして確認した後、モルモットうちわの製作に入る。まずはサンプルを見せ、一人ひとりに台紙を渡す。台紙には身体のラインと口だけつけてある。全体は正円で、親指を入れることができる穴が開いている。幼児たちは、最初は目のシールを貰って貼り、次に耳のシールを貰って貼り、各モルモットの名前と色にちなんだ色の花型のシールを貰って貼り、最後に名前の書いた小さなシールを貰って貼って完成。皆が終わった頃を見計らい、完成したうちわをモルモットに見せる指示があり、続いてあおぎかたを習って「あおいでみよう」と指示があり扇いでみてから、「ありがとうございました」の挨拶をして

終了した。

## 4) 幼児の様子

### ①年少組

・ほしぐみ(13名)

幼児たちは3班に分かれた。

幼児4名

幼児4名

幼児5名

モルモットはシャインマスカットちゃん、いちごちゃん、クリームちゃんである。

介在者は順に様々な質問を訊いていくが、幼児からは殆ど返事がない。時折、小さな声で返事がするが、「赤」「しっぽ」など、単語で答えるだけである。幼児たちは大変に静かであるが、小さく頷いている様子を見ると話を理解はしている。

サンプルを見て真似して貼れている幼児もいる一方、全くわからずにとんでもない位置に貼っている幼児が散見された。あまりにも位置がおかしいため、介在者が剥がして貼り変えていた。

名前シールを配布しても読む幼児はおらず、天地も不明で、介在者と教諭が確認して貼らせていた。「あおいでみよう」との指示に、とっさにモルモットをあおいでいる幼児がいた。

・つきぐみ

モルモットはクリームちゃん、べにいもちゃん、ブルーベリーちゃん。

K「目は？」

C「赤」

K「耳は？べらべらしたちようちよみたいなのね」「おしりのほうは？」

C「しっぽ、ない」

K「身体は？(返事なし)白くて丸いですね」

K「手足の長さは？」

C「短い」

質問事項によって返事がない。耳、身体のかたちなど、表現が難しいものには返事がない。

うちわ製作では、やはり、あらぬ位置に貼る幼児がおり、教諭と介在者で正しい位置を示したりして回っていたが、介在者らは基本的には年齢なりの表現を受け入れている。

幼児たちからは殆ど返事がない。ひたすら静かである。

K「名札を付けてあげましょう」「べにいもちゃんに見せてあげて」「いいね～べにいもちゃん、みんな作ってくれて」「最後に、めぐみ先生にも

見てください」「かわいいうちわで、涼しい～とやってみてね」「チームのモルモットのお名前を憶えておいてね。また会えるからね」

など、全て介在者リーダーのセリフである。3人の介在者は見事な連携で手際よく着実に進行していく。

・にじぐみ

幼児たちは3班に分かれた。

幼児4名 いちごちゃん

幼児3名 ブルーベリーちゃん

幼児3名 シャインマスカットちゃん

K「よく見てください。目は？」

C「赤色」「赤色」と口々に答えている。

K「耳は？」

C「耳、見える。ここにある」

K「身体は？」

C「まる！」と口々に答える。

K「手足の部分は？」

C「みじかい！」と元気に大声で答える。

K「短いですね。この短い手で走ったり歩いたりしています」

C「からだの色は先生たちが色を塗ったんでしょ？」という幼児がいる。

介在者の作成したサンプルを見ながら似たようにシールを貼れている幼児もいる一方、まるでわかっていない幼児も散見される。

ブルーベリー班に、耳の上下が逆（舟形）になっている幼児がいたが、介在者がすかさず「これもいいね！」と認めていた。

活動中に幼児が手をモルモットの口先にもっていき、介在者がすかさず口に手のひらをかざし接触しないようにしている。

あとから確認したところ、モルモットと幼児の双方を守るためだとのことであった。「ごめんね、ごはんと間違えてパクっとしちゃうからね」と言っている。

最後には「動物さん、楽しく遊んでくれたからお礼を言います」と言い、全員で「ありがとうございました」と挨拶していた。

・そらぐみ

幼児たちは3班に分かれた。

幼児3名 べにいちもちゃん

幼児4名 シャインマスカットちゃん

幼児3名 クリームちゃん

べにいちもちゃん班の幼児は、小さな声で何度も「べにいちもちゃん、べにいちもちゃん」と呟

ている。名前を覚えようとしているのであろうか。

K「お耳は？」

C「ピンク」（赤ではなくピンクと答えていた）

幼児たちは、介在者のSの目を見ながら色々と話しているのが印象的だった。いつも同じの慣れた介在者が動物と介在してくれることで、動物への距離も近くなっている。

幼児は、うちわを製作すると、介在者から「見せてあげましょう」と言われる前から自分で「ほら」と言ってモルモットにうちわを見せていた。紫色の花のシールをもらった幼児が小声で「むらさき」と呟いていた。

最後に名前シールをもらった幼児が、シールをじっと見ながら「べにいちも。べにいちも。」と読んでいた。自分の知っている平仮名を繋げて音読し、べにいちもちゃんの名前を確認している。Sくんは、モルモットを見ながら何度も何度も小声で「かわいい。かわいい・・・」と呟

いていた。本当に可愛らしい幼児の姿である。

②年長組

・やま1くみ

幼児たちは3班に分かれた。

幼児4名 ブルーベリーちゃん

幼児4名 べにいちもちゃん

幼児4名 いちごちゃん

前にモルモットが来ると、どの班も口々に「かわいいね～」「かわいいね～」と言っている。

K「目は？」

C「赤っぽい」

K「耳は？」

C「うす～いピンク」

K「身体は？」

C「丸っこい」「丸っぽい」

K「手足は？」

C「ちょっと短い」

などのように、「赤」「ピンク」「丸」「短い」だけではなく、「赤っぽい」「うすいピンク」「丸っこい」「ちょっと短い」など、微妙な表現が加わっているのが大変に興味深かった。

うちわを貰ってすぐに「鼻がついてる」と言う幼児や、サンプルのうちわを見て「いちごちゃんて書いてある」と読んだ幼児がいた。ちなみに、シールには「いちご」とだけ書いてあり、「いちごちゃん」とは書いていない。自分で「ちゃん」を付けて読んだのである。

幼児は「どうして花柄（シールが）なの？」  
「まだ完成していないよ」「お花（のシール）が  
ないし、名前も付いてないよ」というように、  
進捗状況を客観的に報告しながら作業を進めて  
いる。年長児となり、状況を客観的に把握でき  
るようになってきている。

介在者から「シールを貼りましょう」と言わ  
れた時、幼児が「いちごちゃんに貼るの？」と  
訊いていて、介在者が「貼らないであげて、う  
ちわに貼って」と言っていたのが面白かった。

このクラスも介在者に指示されるより前に「い  
ちごちゃんに見せるの」と言っていて見せている幼  
児がいた。

介在者が「バイバイのお時間なの」と言ったら、  
「えっ、もう先はないの？」と、もっと別の活動  
がやりたいような、物足りないような発言をし  
た幼児がいた。

・やま2くみ

幼児たちは3班に分かれた。

幼児4名 クリームちゃん

幼児4名 シャインマスカットちゃん

幼児6名 ブルーベリーちゃん

マスカット班の幼児が、モルモットを触る時  
間に回ってきたときに、思わずモルモットに顔  
を寄せてキスをしようとしていた。本当に可愛  
い、いとおしいと思っている表情をしていた。  
毛が抜けた様子を見たらすぐに見つけて「毛が  
落ちた」と言っていた。

介在者が「目は？」と訊いたところ、色では  
なく「大きい・・・いや小さい・・・」とサイ  
ズで悩んでいる幼児がいた。大きいような気も  
するし、小さいような気もする、何に比べて？  
悩ましいと思っているのだろうか。

介在者が「形は？」と訊いたところ、丸とか  
ではなく「まんじゅうみたい」と言いながら両  
手のひらで丸い形状を示す動作をした幼児が  
いた。年齢を踏むにつれて表現の手段が多様に  
拡大してきているのが顕著にわかる。

シャインマスカット班は、製作の最後にシ  
ールを貰った。小さなシールに多くの文字を入  
れているためとても小さな文字なのだが、もら  
った瞬間に、どの幼児も口々に「シャインマ  
スカット」と読み、うちわに貼っていた。上下  
を間違えて貼る幼児は一人もおらず、既に読  
めるようになってきている。シールを貼りな  
がら、「名前を付けてあげないと」と呟いて  
いる幼児がいた。

活動終了後、廊下で幼児たちが話していたが、  
「うちはマスカットちゃんでした」「うちはク  
リームちゃんだよ」というように、「モルモ  
ット」ひとくくりではなく、個別の個体の生  
物として認識し、他の班とは違う動物が来  
たと受け止めていることがわかった。あと  
から介在者に訊いたところ、それを意識して  
指導しているのでとても嬉しいとのことだ  
った。

## 5) 分析

第一に感じたことは、動物との関わりを  
とおして、幼児はまさしく5領域の全てに  
おいて成長していることがわかった。動物  
へ接する態度、動物を何だと捉えるのか  
（社会性）、動物を知ることには知らず  
知らずのうちに言葉を確認することでも  
ある（全く読めない→1文字ずつなら  
読めるから読んで繋げる→見るだけで  
パッと読める。見て、認識して、必ず  
小声で口に音として出して確認する）、  
表現（言葉を用いての表現が徐々に  
複雑化する、身体表現を伴って表現す  
る）など、動物と楽しく関わりながら  
豊かな学習を成立させていることが  
確かに確認できた。動物に対する「  
かわいい」という思い、興味関心や  
愛着心などが要因となって、本人が  
知らず知らず、楽しい気持ちを持ち  
つつ学習意欲を引き出されているこ  
とが明らかに見えて本当に興味深  
いひとときであった。

第二に、全ての面において学年差が  
歴然としていることに気付いた。同  
じ活動を短時間のうちに次々と見る  
ことのできる2時間で、明らかな  
段階を経て成長していていること  
が手に取るように見えて大変に興  
味深かった。

介在者は、今回の活動においては、  
前回も連れてきたモルモットに科  
学的な視点を向ける機会を提供し  
ていた。学年によってうちわ製  
作はやや難易度が低い向きもあ  
ったが、動物にただ感情で接す  
るのではなく、一個の生命体と  
して科学的な視点で接する機  
会も設け、動物との多面的な  
出会いをも意図している。その  
活動は幼児だけでなく教諭にと  
っても興味深いものであると  
見て取れ、動物の専門家から  
教諭とともに専門知識を学ぶ  
という楽しさを幼児に提供し  
ているようにも感じられた。

総合的に見て今回の研究目的に  
照合してみれば、介在者が期し  
ているところが確実に幼児の  
なかに育っていることが確認  
できた。動物介在教育をと  
おして、動物を共に生きる仲  
間として

受け止めていること、可愛いだけでなく敬意をもって動物に接している幼児たちの様子は、まさに介在者の動物に対する姿勢から学んでいることが確認できた。

#### 4. 第4回実践観察調査

年月日：2023年9月19日(火) 10:00～11:55  
介在者3名(K<sup>1</sup>, K<sup>2</sup>, K<sup>3</sup>)

##### 1) 動物の概要

犬5頭

くるみくん(プードルとキャバリアのミックス)  
(小型) 10歳の最高齢

さくらちゃん(プードルとピジョンフリーゼのミックス)(小型)

BORUTO(ボルト)くん(ボーダー・コリー)  
(中型)

まるくん(ボーダー・コリーと柴犬のミックス)  
(中型)

あんずちゃん(ペキニーズとミニプードルのミックス)(小型)

##### 2) 時間の流れ

10:03～10:18 ほしぐみ(保育室にて)年少

10:20～10:35 つきぐみ(保育室にて)年少

10:35～10:50 にじぐみ(保育室にて)年中  
2階へ移動, 犬はトイレ

11:00～11:15 そらぐみ(同上)年中

11:15～11:30 やま1くみ(同上)年長

11:30～11:45 やま2くみ(同上)年長

##### 3) 基本的な運営

①幼児たちが定位置に座る(教諭の援助指導のもと)

②犬との近づきかたと触りかたの指導

最初は握りこぶしで匂いを嗅がせる

手のひらを開いて鼻先に近づける

触る時は上から頭を触ることはせず, 背中を首のほうから下へ向けてそとなでる

慣れてきたら頭も触って良い

大声を出さない

③3グループに分かれ, 各1頭ずつを介在者が連れてきて順に触れ合い時間をもつ。

触れ合いは, グーで匂いを嗅がせる, 手のひらで触る, を基本とする。

##### 4) 幼児の様子

①年少組

・ほしぐみ

介在者が年少児であることを鑑み, 「こわい子

いますか?」と訊いたが, 誰も挙手せず。

「大丈夫だから安心してね」と声を掛けてから犬を出した。くるみちゃんを前で見せながらデモンストレーションをした。他の犬はさくらちゃんと, あんずちゃんである。年少児であることから介在者は犬3頭ともマズルが短くて頭部が丸く, 毛がフワフワと柔らかい犬を選んでいる。

年少児たちはとても静かに介在者の話を聞いていた。自分たちのグループ前に犬が出てきても自分から積極的に触る幼児は見られない。介在者が「もっと近くまで来ていいよ」と声を掛けると幼児たちは皆, 犬に近寄って行った。

幼児は, 最初, 手を出さなかったが, 犬の顔と介在者の顔を交互に見て反応を確かめながら恐る恐る手を出した。すぐに慣れ, 普通に触るようになった。介在者が「触れたね～」と声を掛けてくれ, 幼児は笑顔を見せていた。最初の神経質そうな表情と全く異なる表情になり驚いた。

介在者は, 年少児であっても, 「どこを触っても大丈夫よ」(くるみちゃん), 「ここ触ってみて, 硬いでしょ, 骨があるの。みんなも骨がある?」などと声をかけ, 年少児なりに科学的な興味関心を持てるように援助していた。幼児たちは, そう言われると自分の腕を掴んで骨を確かめ, 「ある!」と答えていた。

幼児が, 前に出てこない犬のケージを見ながら, 「誰がいるか見たい」と介在者に声を掛けていた。その犬は出てこないボルトくんであった。幼児が「何がいるか」ではなく「誰がいるか」と言っていたのが印象的だった。

別れ際には殆どの幼児が犬たちに手を振って別れていた。

・つきぐみ

やはり年少児であるため介在者は細かく気を遣っている。介在者はくるみちゃんを扱っていて, 「くるみちゃんは触ってもらうの大好きだから安心して触ってください」と声を掛けていた。「誉めてあげたり, 可愛いねと言うとわかって喜ぶから, 声を掛けてあげてね」とも言っていた。介在者がさくらちゃんの掌を見せ, 「肉球っていうの。みんなの掌と色が違うね」と言うと, 幼児たちは一斉に自分の掌を見て確認していた。

年少の2クラスにおいては, 先に述べたような外見を持つ犬を選び, 幼児たちがまずは「かわいい」という感情を抱けるようにしていた。

年少児は全体的に発話が少なく、「かわいい」などと言葉にする幼児は殆どいないが、介在者の話には十分に耳を傾け、怖そうにしていた幼児も介在者の「大丈夫だよ」の声に応じてそっと手を差し出していた。この際に教諭がそっと近くで見守っていた。



写真2

くるみちゃんを見ながら説明を聞く年少児  
(教諭が見守っている)

## ②年中組

### ・にじぐみ

犬がケージから出てくるか来ないかの時から「さくらちゃん」「くるみちゃん」という声があちこちから聞こえた。介在者も「あ、憶えていてくれたのね」と答え、幼児たちの発話を嬉しく受け入れていた。

幼児たちは、最初の介在者の全体説明にはつきりと頷きながら聞いている。例えば、幼児は、介在者と犬の顔を交互に見ながら話を聞いていて、この犬に対する接し方を介在者が説明しているのだと理解していることがよく見て取れた。また、教諭や介在者に発話をする幼児も多く見られ、年中児ならではの生き生きとした興味関心の発露と、その思いを言葉に自由に出して周囲の人と共有して楽しむ様子が確認できた。幼児たちは「犬」ではなく「わんちゃん」でもなく、「あんずちゃん」というように固有名詞で呼んでいた。

### ・そらぐみ

犬たちのトイレを済ませてから2階に上がり、そらぐみへ向かった。幼児たちはすっかり支度をし、長く待っていた様子であった。幼児たち

は大変に静かに座っていたものの、保育室のなかに幼児たちの期待感が充満しているように感じた。

このクラスの挨拶に出てきたのはボルトくんであった。介在者が「大きいわんちゃん苦手な人は？」と訊いて下さり、2/3ほどの幼児が挙手をしたため、ボルトくんは他の1/3の幼児のところに行き、他の班にはくるみちゃんとあんずちゃんが来た。ボルトくんとの活動班には特に教諭が寄り添い、様子を見守っていた。



写真3

ボルトくんと接する年中児たち  
(幼児とともに犬に触れ合う教諭)

くるみちゃんを見ていた幼児は、介在者の指示に従って肉球を触り、「とげとげしている」と言葉で表現していた。この幼児はプログラムが終了しケージに入れられるときまでずっと見ていて、最後にケージに入るところまでついて見ていた。本当に興味関心が強いことが窺えた。

## ③年長組

### ・やま1くみ

この組では、まるちゃんがこの日はじめて登場した。臆病な犬ということで、介在者に抱かれて震えていた。ほかにボルトくんも出てきて、ボルトくんが来た班の幼児たちは大興奮であった。年長児になると、ボルトくんのようなシャープな外見で動きが激しい犬でも喜んで受け入れられるようになっている。とても大きな声で幼児が話すので、介在者が「声が大きい！小さい声で話して、小さい声で」と何度も声掛けをしていた。尻尾もいきなり掴もうとする幼児もお

り、介在者が「やさしく、やさしく」と声を掛けていた。犬も「ぬいぐるみ」的な風貌ではなく動きも活発な犬であると、幼児が犬に接する態度も粗く大味になりがちな傾向にあるように見受けた。介在者は、幼児たちの状態に応じて犬を腕で守ったり、犬と目を合わせて言葉を掛けたりして、幼児の圧が犬に直接に及ばないようにしていた。この介在者と犬との強い信頼関係があるからこそ、犬は幼児たちに身体を触らせてくれるようにも感じる。年長児の科学的探究心は非常に強く、幼児自身でも自分の出すパワーに恐らく気づいていないのではないかとさえ感じる。臆病のまるちゃんは常に介在者の傍にいたが、幼児たちも臆病であることを介在者から聞いていたので、年長児ながらもそっと見守ろうとしていた姿が印象的であった。この時、教諭もともに静かに見守っていた。

終わったあと、幼児が、「きょう動物介在って知らなかったの。すごく楽しかった！」と満面の笑顔で言っていたのが忘れられない。

#### ・やま2くみ

このクラスではボルトくんは出なかったが、幼児たちが名前を憶えていて「ボルトくん」と言葉にするため、ボルトくんはそれを聞いて、外に出たくてケージのなかでとても動いたり、鳴いたりしていた。グループで犬をハグしていたとき、幼児が「いいにおいがする」と言っていて、「きのうシャンプーしてきたの」と介在者が言っていた。幼児は犬の毛に顔を突っ込んで匂いを嗅いでいて、犬たちも大変である。積極



写真4

くるみちゃんと接する年長児  
(教諭がともに観察している)

的に犬に接近する幼児たちであったが、介在者がしっかりと犬を抱き、犬に安心感を与えていたのに気づいた。この積極的な幼児たちの姿の後方には教諭が控えて、ともに犬を見ていたのが確認できた。

前掲の写真4は、くるみちゃんを観察した幼児班の様子である。介在者K<sup>1</sup>の姿勢に倣って親しく接する幼児もいれば、しっかりと観察している幼児もいる。教諭もともに観察している。幼児が、様々な在り方で犬との距離を保ち、学んでいることがわかる。

幼児が脚（膝あたり）を犬に舐められ、介在者に「舐めてきた、おれの足」と言っ、舐められたところを手でさすっていた。ひとりごとで「めっちゃ舐めてくる」と呟いていた。その幼児は何度も犬にあちこちを舐められており、顔を近づけたところ犬にキスをされ仰天していた。自分で気持ちや舐められた箇所をどのように処理しているかわからない様子で、一人でうろうろして介在者が持ってきた消毒スプレーを自分で手に掛け、それで舐められた箇所をさすっていた。しかし、いやになって離れてしまうのではなく、また犬のところに戻っていた。その往復が非常に興味深かった。

#### 5) 分析

年長児になると、動物に接する圧力がとても大きい。それに対して介在者は、様子を見ながらコントロールするよう声掛けをしている。動物に対して自分の感情のままに接するのは望ましいことではなく、対象をよく観察し、対象を命あるものと認め、正しく接することをさりげなく指導している。

動物介在教育の実践を見ていて常に感じるのであるが、小動物や犬であっても、この活動においては「ペット」として接しているように見受けられない。介在者が動物に対して、活動を実施する同僚といった姿勢を示し、動物も快適であるようにとこまやかな配慮をしているように見える。そうした介在者の姿勢を見ることは、幼児にとって非常に大切な学びであると感じる。

#### 5. 第5回実践観察調査

年月日：2023年10月24日（火）

1) 動物の概要

犬5頭

2) 時間の流れ

今回は「ワンちゃんとお散歩しよう」というテーマでの活動で、1学級15分程度の活動であった。流れは年少から開始し年中、年長となった（ほしくみ〜つきぐみ〜にじぐみ〜そらぐみ〜やま1くみ〜やま2くみ）。

### 3) 基本的な運営

開催場所は第二園庭である。

方法は、スタートラインから5メートル先のコーンを回ってスタートラインに戻る。各学級3グループ（1グループあたり4〜5人）に分け、介在者が付き添って一人ずつおこなった。

### 4) 幼児の様子

#### ①年少組

・ほしくみ（10:20〜）

K「今日は、みんなが遊んだことのあるワンちゃんを連れてきました。さくらちゃん、あんずちゃん、くるみちゃん、ボルトくん、マルちゃんです。この前このワンちゃんたちにいい子いい子して優しくなでてくれたね。ワンちゃんたちは、優しくしてくれたことを覚えています。今日は、リード（紐）をもって散歩に挑戦します。」

C「え〜、こわいよ〜、できるかな〜」

などと様々な声が聞こえた。

K「大丈夫。先生も一緒にするから。今からリードの持ち方いうよ。丸くなってるところに右手を入れて、その下のところを左手で持つんだよ。先生は、こっちの紐を持つから一緒に行かれるよ。」

これを実際にやって見せながら説明していた。

K「出発するとき、さくらちゃん行くよって言うてから、紐を引っ張るのではなく、さくらちゃんと手を繋いでいるつもりでゆっくり歩いてね。」

こう言いながら実演した。幼児たちは静かに聞きながら介在者の動きをじっと見ていた。

全員が経験したあと、幼児たちは緊張が解けたのか、笑顔や安心した表情を見せていた。

K「みんなでわんちゃんのお散歩をしてくれたから、わんちゃんたちにご褒美におやつをあげようと思うの。一人一個ずつ配るから順番にわんちゃんのお皿に入れてね。」

この後、「さくらちゃん、いいよ」と言うと、さくらちゃんが食べていた。幼児たちは、介在者のモデルを真似て全員が餌やりを終えると、最後に犬たちとタッチしてお別れとなった。幼児たちは順番に犬を撫でていた。

以上のような流れで、他の5学級も同様な内容、方法で実施した。

### 5) 分析

犬は、5頭のうち3頭は小型犬であった。残りの2頭も以前に触れているため、怖がる幼児はいなかった。介在者も幼児が不安にならないように様々な配慮をしている。例えば、介在者がポケットに餌（粒状）を入れているのを犬はわかっている。それを貰えるので吠えたり騒いだりしないことをうまく利用しているのだろうか。幼児が楽しい時間を過ごせるように犬を育てている。

## 6. アンケート調査

文章は記述されたまま記載している。

### 1) 5月31日（水）犬

<年少組教諭>

- ① 入園して初めての動物介在教育で、殆どの幼児が、犬が来ることを楽しみにしていた。多くの幼児が近くで犬を視たり触ったりすることに興奮気味であった。中には怖がっている幼児もいたが、友だちや教諭の姿を見て触れ合うことができた。
- ② 介在者が犬を連れてクラスを巡回したが、幼児たちは静かに待っていた。介在者の話を興味深そうに聞いていた。初めて触れ合う幼児や怖がる幼児もいることを予想し、小型犬を提示してくれた。犬への挨拶（掌を拳にして鼻先に持っていき匂いを覚えてもらう。通称、「グー挨拶」）や、背中への撫でかたなどを丁寧に説明していた。
- ③ 巡回してくる前にスマックを着せて待機した。小型犬でも怖がる幼児もいたので、傍に付き添い、一緒に手を添えて犬に触れたり、話しかけたりした。幼児たちは「可愛かった」「今度いつ来る？」と、とても楽しみにしている様子である。

<年中組教諭>

- ① 年中に進級して初めての体験である。昨年の体験を思い出し、動物と関わるときは静かにすることを思い出している。犬との触れ合いは昨年度も経験しているため、連れてこられた犬の名前を憶えていて、「さくらちゃん」と呼んでいた。
- ② 動物との触れ合いでは動物が驚かないよう静かにすること、グー挨拶の確認、優しく

接したり褒めたりすると犬は安心すること、犬の名前を呼びながら背中を優しく撫でることなどを提案していた。

- ③ 大型犬は怖がる幼児がいるため、付き添うようにした。犬に触れた幼児が「ふわふわしてる」「あたたかいね」などと発言したときに、共感するようにした。

<年長組教諭>

- ① これまでに犬との触れ合いは何回か経験しているため、大声を出すと犬がびっくりして動くことや、名前を呼んだり優しく触ったりすると喜ぶことを覚えていた。大型犬は、幼児が寝る姿勢になると安心する様子を見て、納得しているようであった。
- ② 「好きな食べ物は何か？」「我慢することって、あるの？」といった幼児の発言に対して、犬の気持ちを教えてくれた。
- ③ 大型犬でも怖がる幼児が殆どおらず、見守っていた。転園してきた幼児は触れ合い体験は無いようなので、できるだけ付き添いながら一緒に行動するようにした。

2) 6月22日(木) モルモット

<年少組教諭>

- ① 前回の「犬」とは何処が違うか、という介在者の質問からスタートしたが、幼児にも理解できる話だったので、思い出しながら答えていた。触れ合い方の説明を真剣に聞いている様子であった。
- ② モルモットを見せながら、前回の犬との違いを問うていた。大きさ、かたち、目の色、耳の色とかたちなどを実際に見せながら問いかけ、幼児たちの発言を拾いながら進行していた。生きている動物には常に大声を出したりせず静かに接することを伝えていた。
- ③ 犬とは異なり殆どの幼児が「かわいい」と言いながら接していたので、見守るようにした。

<年中組教諭>

- ① 介在者に「何という動物か？」と問われると、一斉に「モルモット」と答えていた。犬との違いについての介在者の問いかけに対して素早く返答していた。怖さのない動物なので、「早く触りたい」という発言が多く聞かれた。
- ② まずは臍物に共通していることとして、静

かに接することを話していた。犬との違いを、実物を見せながら問答形式で確認していた。

- ③ 一人ひとり籠を膝に載せて触る活動だったので、片手で触ることもできるように援助した。

<年長組教諭>

- ① 何回か触れ合いを体験しているので、とても楽しみに待っている様子であった。触るときに口に手を持っていく幼児がおり、介在者から「餌と間違えて食べちゃうよ」と言われて驚いて手を引っ込めていた。
- ② 「わんちゃんよりずっと小さいから、この前より静かにしようね」と声を掛けていた。一匹ずつ性格が違うことを話し、優しく接するように確認していた。
- ③ 介在者が実物を手に載せて見せているのを、ども幼児も見えるように配慮した。また、介在者の話に合わせて、何の動物でも優しく接することが大切なのだということを助言した。

3) 7月6日(木) モルモット

<年少組教諭>

- ① 前回と同じモルモットが登場し、嬉しそうにしてゲージの上にいるモルモットに触ろうとして介在者に「まだ触らないでね、今は見るだけ」と言われて話を聞こうとする姿勢になっていた。
- ② モルモットに触ろうとする幼児がおり、「まだ見るだけよ」と声を掛けていた。
- ③ 幼児は、モルモットには親しみをもって接しているので、見守るようにした。介在者が体の各所を確認しているときには幼児とともに復唱した。うちのシールは多少ずれている幼児もいたが見守るに留めた。

<年中組教諭>

- ① 前年度も数回は触れ合っているため、どのような動物か理解している幼児が多い、幼児1名が触りたくない様子で、教諭に抱かれて泣いていた。うちわ製作では見本を見ながらスムーズに取り組んでいた。
- ② 動物の体についての確認は、幼児たちは既に分かっているので、スムーズに確認していた。うちわ製作も初めてではないので、自発的に始めるのも認めているようであった。

- ③ 泣いていた幼児も落ち着いてきて他児とともに活動に参加したので、傍らに付き添った。うちわ製作においても様子を見守るに留め、できあがったうちわで扇いでもらい共に楽しんだ。

#### <年長組教諭>

- ① 姿かたちが可愛いと、いとおしむような状況や雰囲気が見られた。うちわ製作をするよりも実物と関わりたいようであった。うちわ製作は単純すぎるようで、与えられた課題をこなすといった様子であった。モルモットへの接し方、各部の確認などはひととおりするが、もはや幼児たちは即答するほどの慣れを見せていた。
- ② うちわ製作も単純すぎるため、見本どおりに完成した幼児が殆どであり、それを褒めている。シール貼り以外の活動があってもよいのではないだろうか。
- ③ 介在者は、モルモットとの触れ合い体験をもっと主張してもよいのではないかと。年長組にあっては、うちわ製作ではなく、世話のしかたや餌の種類、与え方などを実際に見せたり話したりといった方法も採り入れてもよいのではないだろうか。

## 7. 聞き取り調査

### a. アニマルシップ介在者

現在、本園の動物介在教育の企画・運営を委託しているアニマルシップの介在者から、今年初めて聞き取り調査を実施した。実施日は2023年9月6日（水）におこなった。聞き取り方法は自由形式で、幾つかの質問に対して自由に話してもらう形式を採用した。聞き取り対象者はアニマルシップの代表を務める介在者<sup>K1</sup>と、<sup>K2</sup>である。

アニマルシップの基本的な活動や方針は、ホームページに記載されている。アニマルシップは幼児から高齢者まで様々な年代に応じて多様なプログラムを提供している施設である。介在者は動物介在教育や育児の経験があるベテランで構成されていて、花園誠の門下生として研究を重ねている。数多くのプログラムを様々な世代に向けて開催しているアニマルシップであるが、そうしたなかで幼児を対象にしたプログラム作成と実施において留意している点を訊いた。

アニマルシップでは、幼児に対するプログラ

ム実施の際、最も留意する点は、「(動物に対する)好き嫌いが出る前の真っ白な状態なので、まずは介在者たちが、動物とともに居て仲が良くって当たり前な姿を、自分たちの接し方をおして見せたい」とであるという。これに対して第二筆者からは、幼稚園教諭のなかにも動物が苦手な者もいるので、幼児と一緒に慣れていきたいと言っているという話も出された。アニマルシップでは、動物を提示して「見て下さい」という方針は取らない。それはそれで意味のある活動であるが、ともに生きる仲間として、人間と動物の関係をまずは介在者が示し、その様子を幼児にも見てもらい、実際にそのように接してもらおうようにしているという。そのために、幼児にも動物にも無理をさせないように注意している。無理に接しさせれば動物も疲れるし、幼児も楽しめない。

アニマルシップでは、動物に接する際の方法についてもこまかな指導があり、それから幼児と動物が初めて接することになる。また、接している最中にも幼児が好奇心から動物を試そうとするような行動に出ることがあるが、その際には幼児を制御し、そうした接しかたをすると動物が快適でないことも伝えるようにする。幼児の場合には、そうした言葉かけをすると幼児の姿が顕著に変わり、動物との望ましい距離の縮めかたを理解できるようになるという。ただ自由に幼児に動物を触らせるのではなく、そこに介在教育介在者が入ることによって初めて動物介在教育が成立するとのことである。また、この際、教諭もともにあって幼児と経験を一にすることも、非常に意義深いとの話であった。教諭が傍で支えることにより、幼児と動物の距離がぐっと縮まるのが確認できるとのことであった。介在者の言葉によれば、「幼児のプロと動物のプロが交差するところに、幼稚園における動物介在教育のよりよい達成が目指せる」という。幼児が動物と接するにおいて躊躇している場面で、教諭が様子を見計らってサッとフォローする言葉を発するだけで、両者の距離が顕著に縮まるとのことであった。

また、興味深い話も聞くことができた。動物介在教育で来訪する動物たちは、そのためのトレーニングを受けているプロであるという。介在者たちもまたプロであるが、人間だけでなく動物もまたプロであって、プロ同士で連携して

動物介在教育をおこなっているという感覚であるとのことであった。たとえば犬をとっても一頭ごとに性格や体力などの特性があり、介在者はそれを知ったうえで、負担がかかり過ぎないよう様子を見ながら活動に参加させているという。動物と幼児の両方の状態を見極めながら臨機応変にその場で対応していくとのことであった。動物介在教育は、筆者らが観察をしても常に感じるのであるが、介在者が時に動物を幼児から守ろうとしたり、動物との接し方を毅然とした態度で幼児に伝えている姿が確認できる。動物に対して一定の敬意をしっかりと持ちながら接している介在者の姿からか、多少はつきりとした言いかたで行動を制御されても、幼児がそれに怯む様子などはなく、すぐに理解し受け入れて接し方を変化させる幼児の姿が確認できる。

最後に、幼児期における動物介在教育の最も重要な点は、動物に接する感性を育てることであるとのことであった。動物と接する方法は接触のみならず観察も導入しており、科学的な興味関心も育てるようにしているという。ときに全く真実ではないことを言う幼児がいたとしても、それを指摘することはせず、幼児の素直な発想として介在者は受け入れるようにしているという。まずは介在者が動物を大切に思っている心に触れてもらい、そうした感性を感じ取ってほしいとのことであった。

聞き取り調査から改めて確認できたことは、15～20分程度の短時間でも十分に練られているからこそ充実した手ごたえある活動になっているのだという点である。その場で観察していると、短時間ながら進行する介在者の手際よさと、豊かに変化する幼児の表情と動きには目を見張るばかりである。その背景に、人間と動物との望ましい関係性を考究する花園誠門下の介在者の心意気を感じずにはいられなかった。

#### b. 動物介在教育担当教諭（教諭 T<sup>1</sup>、T<sup>2</sup>）

2023年度、動物介在教育担当の教諭に聞き取り調査を実施し、教諭として、介在者と教諭の役割をどのように考えているのかを、2名の教諭に訊いた。

教諭は、介在者に対して、正しい動物との接し方を教えてくれるとともに、少しでも触れると誉めて動物に対する恐怖感を取り除くことに

専心していると感じているとのことである。決して無理強いすることなく、犬の気持ちと幼児の気持ちの双方に常に配慮し、どちらにとっても不快な活動とならないようこまやかな配慮をしている。最終的には幼児たちが動物を友人のように受け入れることを目指していると感じるという。

それに対して教諭自身は、この活動の主担当は介在者であることを鑑み、あくまでサブの立場を維持するようにしているという。特にこちらが声を掛けたりすることも控え、介在者を介して幼児と動物とが多く関りを持つるように注意深く見ている。どうしても接するのが難しい幼児がいた場合には、素早く援助するようにしているという。

総じて、動物介在教育は、初めて動物に接する幼児も多く、初期の体験として貴重な機会になっていると感じているとのことであった。介在者と教諭は、それぞれの立場をよく理解したうえで連携し、なかなか経験できない動物との触れ合いの時間を幼児たちが十分に楽しめるように援助していることが確認された。

## IV・総括

今回の調査では、介在者と教諭の連携について、冒頭に掲げたような視点をもって考察をおこなった。

ここでわかったことは、動物介在教育においては、人間と動物の関係性について研究・実践をおこなっている介在者が活動をリードする立場にあるということである。実践観察調査で確認されたように、教諭の活動を示す二重下線は少なく、教諭はあくまでサポート役として存在していることがわかる。

しかしながら、観察で確認されたように、幼児は教諭とともに観察し、発見したことなどを教諭と共感することを楽しみにしていることも確かである。普段の生活を共にしている教諭が存在しているからこそ、幼児たちは安心して動物に接することができるし、同時に教諭と共感することが大きな楽しみや喜びになっていることも確かである。

また、もちろん、まれに恐怖感を抱く動物に対しては、教諭が傍に寄り添うことで動物に接する力を得られることは、以前から確認されて

いた点である。

結論として動物介在教育においては、あくまで立案・計画・実施は介在者がおこなうものであるけれども、そこに教諭がともにあることが、目的達成に不可欠であるということが出来る。

#### 【謝辞】

研究を快諾し、聞き取り調査を含む実践調査に協力して頂いた動物介在教育「こども動物教室アニマルシップ」介在者の皆様と動物たち、帝京めぐみ幼稚園の園長（第二筆者）、教諭、在園児、および写真掲載をご許可下さった皆様に感謝を述べるとともに、御礼を申し上げます。

#### 【文献】

平成 29 年公示「幼稚園教育要領」文部科学省  
朝日新聞記事  
2022 年 7 月 14 日（木）日刊 耕論「動物とのふれあい必要？<sup>[1]</sup>」  
2022 年 7 月 31 日（日）日刊 フォーラム「動物とのふれあい必要？<sup>[2]</sup>学校では」  
こども動物教室アニマルシップ ホームページ

#### 【注】

i 溝口綾子著「幼稚園における動物介在教育の実践—身近な動物とのふれあい体験を通して—」（日本教材学会発行『教材学研究』第 18 巻 2007 年 3 月, pp. 219 ~ 226 所収）  
ii 永井理恵子，溝口綾子著「幼稚園における動物介在教育にかかわる保育者の意識の変容」（『帝京短期大学紀要 No. 23:165-174, 2022）  
iii 永井理恵子，溝口綾子著「幼稚園にける動物介在教育の実践—幼児の動物とのかかわりの様態の変容」（『帝京短期大学紀要』No. 24:153-169,

# Practice of Animals-Assisted Education in the Kindergarten

## —Collaboration between Children's animal school and Kindergarten—

Rieko NAGAI<sup>1)</sup> · Ayako MIZOGUCHI<sup>1)2)</sup>

1) Department of Early childhood Education, Teikyo Junior College

2) Teikyo Megumi Kindergarten

---

### **【abstract】**

**【Problem/Purpose】** Teikyo Megumi Kindergarten has been practicing "animals-assisted education" for 17 years since 2006. This practice is an educational activity carried out in collaboration with the Animals Assisted Systems Laboratory of the Department of Children's Studies, Faculty of Education and Human Sciences, Teikyo University of Science, and has consistently been of great interest to children and their parents since its inception. The year before last, we had focused our analysis on changes in the awareness of kindergarten teachers involved in this activity, and last year we focused on young children and attempted to examine changes in the way they interact with animals. This year, the third year, we will report on case studies of collaboration between organizations that practice animals-assisted education and the kindergarten in implementing animals-assisted education.

**【Method】** We observed all 5 animals-assisted education sessions conducted from May to September 2023, recorded the actual activities, and asked the staff of organizations that practice animals-assisted education about their intentions in educational practice. In addition to hearing what they are doing, we also interviewed kindergarten teachers and introduced the actual collaboration between those who plan and implement programs and the kindergarten teachers who receive them.

**【Result】** This is the third practical report on animals-assisted education at Teikyo Megumi Kindergarten. This time, based on the theme mentioned above, we conducted an observational survey focusing on the actual collaboration between the staff who plans and implements the program and the kindergarten teachers, and at the same time conducted interviews with both parties. As a result, although the results of implementing animals-assisted education are led by the staff who is an animals-assisted specialist, the kindergarten teachers fully understand the significance and provide appropriate support. It was also confirmed that the role of animals-assisted education in early childhood has been well researched and put into practice.

**【Discussion】** Animals-assisted education is a practice that takes place in a short time of about 15 minutes for each class. Although this practice is short in time, the activities during that time are managed by staff who are experts who fully understand the significance and role of animals-assisted education, which is why great results can be achieved even in a short period of time. Kindergarten teachers not only carefully check the children's situation and provide appropriate support, but also sometimes interact with animals in a fresh way together with the children, and have an attitude of having fun learning together. Significant results have been shown when the staff and teachers understand each other's expertise and engage in the same activity. Additionally, what we have clearly learned from this research is that this activity relies on a deep relationship between the staff and the animals. Staff have a deep understanding of animals, and are also in a position to protect them from children who sometimes take strong stances out of curiosity. Staff perceive animals as partners in the practice of animals-assisted education. It became clear for the first time that the thoughts of the staff were being conveyed to the children, and that this meaningful activity was bearing fruit.

**【Key words】** Animals-Assisted Education, kindergarten children, staff, kindergarten teachers, Kindergarten teaching procedures